2023年12月3日（日）待降節第一主日朝礼拝説教

『切り株から出た若枝』井上隆晶牧師
イザヤ書11章1～10節、ルカ福音書1章13～20節

❶【切り倒されたダビデ王朝】

今日からキリスト教の暦で「待降節」ラテン語で「アドヴェント」という時に入ります。アドヴェントとは「待つ」という意味です。キリストの降誕と再臨を待ち望むことがテーマになります。このアドヴェントによく読まれるのが今日のイザヤ書の個所であり、メシア預言として有名な個所です。1節を見ましょう。

「**エッサイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの若枝が育ち、その上に主の霊がとどまる。**」（イザヤ 11：1）エッサイとはダビデのお父さんの名前です。サウルがイスラエルの最初の王様でしたが、神様の御心を行わなかったので退けられ、ダビデが次の王になりました。ダビデもいろんな罪を犯しましたが、彼はいつも神に立ち返りました。しかし、ダビデの死後、その国は北のイスラエル王国と南のユダ王国の二つに分裂し、王様たちは神様の御心を行わなかったので、やがて二つの王国は滅ぼされてしまいました。それを「エッサイの株」と表現しているのです。つまりダビデ王朝という大木は切り倒されて、株だけが残ったという訳です。しかしその株は死んでおらず、やがてそこから「**ひとつの芽**」が萌えいで「**ひとつの若枝**」として育つというのです。その若枝の上に「**主の霊**」がとどまります。その若枝こそメシアなのです。メシアは正しい裁きをし、この世に平和をもたらし、全世界は主を知るようになると書かれています。これは主イエス・キリストが生まれる700年前に書かれた預言です。

❷【なぜ、イスラエルの国は滅んだのか】

なぜ国が滅び、切り株だけになってしまったのでしょう。ヒントになるお話が、旧約聖書のサムエル記上4章の中に出てきます。

●イスラエル軍はペリシテ軍と戦いましたが、打ち負かされて 4000 人の兵士が死にました。彼らは自分たちの陣営に退却し「なぜ主は今日、我々がペリシテ軍によって打ち負かされるままにされたのか」と反省し考えました。そして彼らが思いあたったことは「主の契約の箱を持って来なかったからだ」ということでした。契約の箱とは神自身を現わすものです。「十戒の石板、マナ、祭司の杖」の三つが箱の中に入っていましたから、今でいえば「聖書、聖パン、十字架」でしょうか。「あっ！聖書を持って来るのを忘れた」と良く言うでしょう。そんな感じです。そこで彼らはシロから主の契約の箱を運んできました。主の契約の箱が陣営に到着すると、イスラエルの全軍が大歓声が上がり、大地がどよめきました。イスラエルの神、自らが戦いに出向いてくださったということで、兵の士気が上がったのです。その大歓声を聞いて、ペリシテ軍は非常に恐れました。「あの巨大なエジプト軍を撃った神が

出て来た。これは命がけで戦わないと自分たちは奴隷になるぞ」とますます勇敢に戦って、イスラエル軍を撃ち負かし３万人の兵を倒したのです。イスラエル軍は敗走し、契約の箱はペリシテ人に奪われてしまいました。なぜ、契約の箱を持って来たのにイスラエル軍は戦いに負けたのでしょう。

宗教というのは英語で「レリジョン」と言って「**再結合**」という意味です。神様と人間との関係が切れてしまった時に、神の手と人間の手が再び結び合わされ、和解がなされ、関係が回復することです。だから神様の手に、人間の手がしっかりと結ばれなければならないのです。それなのに神様がいくら手を伸べて呼びかけても、人間が応答しようとしなければ、関係は回復しません。
いくら契約の箱を持って来たからといって、ちっとも神のいう事を聞こうとしなければ勝てないのです。それは神を自分の利益の為に利用しているだけで、自己中心的な信仰です。**信仰とは徹底的に、神に自分を合わせることです。なぜなら考え方が歪んでいるのは神ではなく、人間だからです。神だけが正しいお方です。だから神に合わせなければなりません。神のいう事を聞き入れなければなりません。それが神中心の信仰です。いくら高価な聖書を持っていても、その神の言葉を聞こうとせず、従おうとしなければ、その人の信仰は形だけであって、その人から神は去るのです。いくら立派な神殿が建っても同じです。**契約の箱が奪われたことは、イスラエルから神が去ったことのしるしなのです。イスラエルの国が滅んだのは、このように神に帰らず、神の声を聞かず、何でも自分勝手に行ったからなのです。

❸【信仰を持つ時、再び神の命は芽生える】
しかしサムエル記の中には希望に溢れた物語が出てきます。それは少年サムエルの物語です。サムエル記３章を読むと「**そのころ、主の言葉が望むことは少なく、幻が示されることもまれであった。**」（3：1）とあります。まだ聖書という一冊の書物がなかった時代です。神様はある人を選んで、言葉と映像で語られました。神は語ったのでしょうが、誰も聞こうとしなかったのです。祭司エリの目がかすんで見えなくなっていたのは、神が見えず、分からなくなっていたイスラエルの象徴です。しかし「**まだ神のともし火は消えておらず、サムエルは神の箱が安置された主の神殿に寝ていた。**」（3：3）とあり、信仰のともし火は消えてはいませんでした。神はこの少年サムエルに語りかけられたのです。この幼い子は、神が語りかける小さな声を聞く耳を持っていました。

●先日、大宮保育園の 12 月のお誕生日会で「なぜ献金するのか」についてお話しをしてきました。心臓と血液の話をしました。すべての物を神にお返しすると清くなり、生きるというお話です。そして清くなったら回すという事です。子どもって本当に人の話を聞きます。それと目です。いつも大人や先生の顔や行動を見ています。そして真似ます。あんなにまじまじと見つめられたのは久し振りです。

幼いサムエルは「**主よ、お話しください。僕は聞いております。**」（3：9、10）といいました。この「聞く」という言葉は、旧約聖書では約千回、新約聖書では425回も出てきます。「**聞け、イスラエル**」、「**耳のある者は聞きなさい**」という言葉を聞いたことがあると思います。この聞くことこそ、信仰者の姿なのです。「**信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。**」（ローマ10：17）とあるからです。

基本に帰らなければなりません。まず聖書を開いて神の言葉を聞くのです。**信仰は神の言葉を聞くことによって始まります。信仰は人から出るものではなく、神から来るものです。だから聖書に聞かない人は信仰は出てきません。**そして聞いたらそれを行うのです。聞くだけで行わない人は、僕ではありません。サムエルは「**僕は聞いております。**」といいました。僕とは主人が命じられた言葉を頭の中に記憶し、いつも思い出し、それを行う人の事です。イエス様が水を汲めと言われたら、ぶどう酒ではなく水を汲むのです。聞いても「水なんて汲めるか！」と笑って何もしない人は僕とはいいません。例えば「**悪人に手向かってはならない。**」（マタイ5：39）「**自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。復讐は私のすること…と主は言われる。**」（ローマ12：19）と言われています。自分で復讐する人は、神の言葉を聞かず、従わない人です。**神を重んじる人は、神の言葉を重んじ、聖体を重んじ、教会を重んじます。そのような人を主は大切にして下さり、その人の願いを聞いてくださいます。**

私はメシアは「**切り株**」の上に芽生えるという点が重要だと思います。切り株とは神の裁きであり、悔い改めです。悔い改めて神に立ち返る者の上に、メシアは来るのです。悔い改める者の中に神の国が始まるのです。私たちが初心に帰り、悔い改める時、教会は復興し、人も立ち上がり、生き始めます。アドヴェントの時とは、そのような時にしたいと思います。